

平成 18 年度「東北大学学校ボランティア」活動報告

—— 大学生による社会体験活動の教育効果の検討 ——

八木 美保子

東北大学学校ボランティア事務局代表
東北大学大学院教育学研究科

本報告は、2003 年度に発足し今年度で 4 年目の活動を終えた「東北大学学校ボランティア」(以下、学校ボランティア)の平成 18 年度の取り組みを報告するとともに、大学生が自主的に社会体験活動をすることの教育効果を検討することを目的とする。

今年度は、昨年度の活動が継続して実施され、長期の活動が増加するなどボランティア組織として安定的な活動が可能になり新たな展開の年となった。また、運営の中心組織である事務局は初代のメンバーが卒業し、創設時の理念を知っている学生が減ったこと、そして 1 年生 4 名を含め 13 名という大人数になったことで次のステージを迎えた。これまでの在り方を見直し組織としての機能を高めるとともに、運営方法を受け継ぐ後進の育成にも力を入れ始めたという点で、平成 18 年度は組織の維持・改善にとって重要な年であった。

1. 「学校ボランティア」概要

学校ボランティアは、次の 2 点¹を目的として発足した組織である。

- ① 大学生によって地域の教育活動がより豊かになること
- ② そこでの活動を通して学生が社会の一員として成長していくこと

地域の教育活動の活性化に関しては、宮城県および仙台市の各教育委員会と連携しながら継続的に活動するなかで「算数の学習意欲が高まった」などの意見が寄せられたり、各学校からの継続的な依頼が直接寄せられたりすることから一定程度達成できていると考える。しかし、現在のところそれを示す記録を残していないため、今後学校や保護者にアンケートを採るなどの対応が必要である。学生の教育効果に関しては、後に改めて考察することにしたい。

(1) 組織

平成 19 年 3 月現在、学校ボランティアには 159 名の学生が登録をしている。教育学研

1 水原克敏・渡利夏子「[大学生による学校参加ボランティア・プロジェクト]の実践報告」東北大学教育学研究科 教育ネットワーク研究室『教育ネットワーク研究室年報 第 5 号』平成 17 年 3 月 p103

究科水原克敏教授を顧問とし、同研究室内に設置されている事務局²が運営の中心を担っている。顧問は運営上の方針など重要事項についての指導助言を行い、日々の活動を実際に企画・運営しているのは事務局の学生たちである。

登録学生の学部構成を見てみると（下表）活動先が学校ということもあってか教育学部の学生が多くなっている。しかし本組織は全学を対象とした活動であり、学部を越えて全学の学生が活動できることが特徴である。キャンパスの配置といった地理的条件から情報が伝わりにくいためか、理系学部の学生が少ない傾向にあるので、各学部での広報活動などを行う必要があるだろう。

159名の登録学生のうち実際に活動をしているのは30名ほどである。一度活動した学生は多くが継続的に他の活動にも関わっているが、登録しても活動には一度も参加していない学生も多く、いかにして多くの学生に活動を促すかが大きな課題となっている。

学部	登録人数	大学院	登録人数
文学部	22	文学研究科	2
教育学部	65	教育学研究科	12
法学部	11	工学研究科	3
経済学部	2	経済学研究科	1
工学部	11	情報科学研究科	6
理学部	15	国際文化研究科	2
農学部	2	環境科学研究科	2
歯学部	0	登録学生合計	159
医学部	2		
薬学部	1		

（２）活動までの流れ

学校ボランティアは、興味を持った学生にまずホームページ³を通して登録学生となる手続きをしてもらっている。前項の登録学生数とは、登録手続きをしている学生の人数である。実際の活動は、その後活動を希望した場合に始まる。

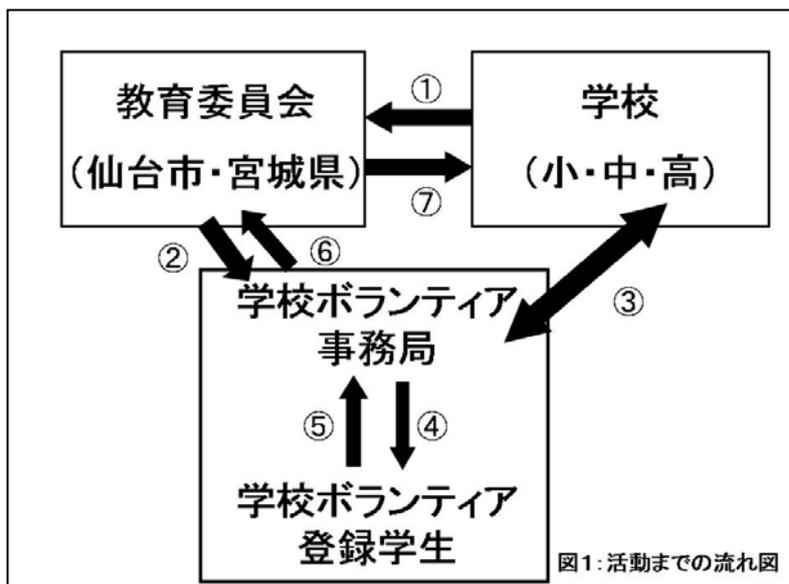
登録した学生はホームページから活動依頼を自由に見ることができるようになってお

2 平成18年度の事務局は、八木美保子（教育学研究科博士課程後期1年）、森田有一（情報科学研究科博士課程前期2年）、佐藤真衣（教育学研究科博士課程前期1年）、杉原由佳（教育学研究科博士課程前期1年）、箕輪寛記（教育学部3年）、齋藤慶一（教育学部3年）、石田賢示（教育学部2年）、宮城淳史（教育学部2年）、小田部翔（工学部2年）、阿部友幸（教育学部1年）、小野寺雄太（教育学部1年）、花田佳菜子（教育学部1年）、増井拓哉（文学部1年）の合計13名である。

3 学校ボランティアのホームページ（<http://www.sed.tohoku.ac.jp/volunteer/>）で、登録手続き、活動申し込み（パスワードが必要）、活動報告の閲覧、事務局の活動日記閲覧ができる。

り、各自がそれぞれの条件にあった活動に応募するという形態である。そのため、登録した学生が全員活動しているわけではない。この形態は、学年も学部も違う学生達が置かれている多様な状況に配慮し、より多くの学生に参加してもらうことを意図している。

図 1 はボランティア活動が開始されるまでの流れを示したものである。小・中学校は教育委員会を通して、高等学校の場合は学校から直接活動が依頼される。ここでは仙台市教育委員会を通しての活動の流れを見てみよう。



①学校側から教育委員会に依頼が寄せられ、②教育委員会から学校ボランティアに連絡がくる。③依頼を受け、学校ボランティア事務局が学校と活動の詳細について連絡をとる。その際の主な質問事項は図 2 に示した通りである。この他、活動の内容に応じて質問事項

を加える事もある。④学校・事務局間の連絡を経て、登録している学生全員にメールで依頼内容を伝える。⑤活動を希望する登録学生は、ホームページを通して活動の申し込みを行う。その後、学生・事務局間で一度打ち合わせを行う。⑥学校・学生・事務局で情報を共有した上で、事務局が教育委員会に活動参加者を報告する。教育委員会が参加確認および保険への加入手続きを行う。⑦最終的に教育委員会から学校に連絡がいき、その後学生は学校で活動を開始する。事前に再度学生・事務局・学校で打ち合わせをすることもある。

学校との連絡事項

- ・活動の具体的内容(依頼を受けた段階では「授業の指導補助」「課外活動の指導補助」など、簡単な説明がつけられているのみ)
- ・活動のスケジュール(学生が活動できる時間帯かどうか、活動の頻度、活動期間など)
- ・障がいを持った児童・生徒の有無(専門的な知識や技術を有していない学生も多いので、場合によっては依頼を受けられないこともある)
- ・交通手段

図2

この間に要する時間は個々の活動によって異なるが、2週間から3週間である。遠方での活動や特殊な活動に関しては学生が集まりにくいので、募集期間を延長するなどの対応をしている。

2. 平成 18 年度活動報告

(1) 平成 18 年度の主な活動

主な活動内容は以下の表の通りである。宮城県教育委員会主催の「地域学習支援センター」事業や蔵王高校など、毎年恒例となるような活動ができた他、長期にわたる活動が多いことが特徴であった。また、日本学生支援機構主催の交流会に参加するなど、学外組織との積極的な交流も始めた。

月	活動
4	入学式でピラ配り（6日） 仙台市教育委員会で 2006 年度活動について打ち合わせ（6日） 学生への説明会（25日） 教職科目の授業内で学生募集
5	太白小学校活動（1, 2, 8, 9, 10日） 八幡小学校活動開始（～年度末） 荒町小学校活動開始（～年度末） 中田小学校活動開始（～年度末）
6	貝森小学校活動（12～14日） 吉成中学校活動開始（～10月）
7	人来田小学校活動開始（～年度末） 宮城県教育委員会主催「地域学習支援センター」事業開始（～8月） 通町小学校活動開始（～年度末） オープンキャンパス用ポスター作成（26日） 蔵王高校夏季課外講習（21～31日）
8	宮城県教育委員会主催「平成 18 年度みやぎ寺子屋事業」（7, 8日）
9	
10	教職科目の授業内で学生募集 木町通小学校活動開始（～年度末）
11	日本学生支援機構主催「学生ボランティア関係者懇談会」出席（16日） 長町小学校活動開始（～年度末）
12	『「学びの転換を楽しむー東北大学基礎ゼミ実践事例集ー』 （東北大学出版会，2007）掲載用原稿執筆
1	貝森小学校活動開始（～年度末）
2	感謝状贈呈式（14日） 学生向け年度末交流会（14日）
3	仙台市教育委員会で年度末打ち合わせ（1日） 蔵王高校春季課外講習（予定）

(2) 活動概要

以下は各活動の担当事務局メンバーが執筆した活動の概要である。

① 太白小学校

【活動日】平成 18 年 5 月 1(5 名), 2(0 名), 8(5 名), 9(0 名),

10(5 名)日, 7 月 26 日(2 名)

【活動者】合計 10 名 (下の表を参照)

教育学	博士1年	女	教育学部	学部1年	男
情報科学	修士2年	男	教育学部	学部1年	男
教育学部	学部4年	女	教育学部	学部1年	男
教育学部	学部3年	男	教育学部	学部1年	女
理学部	学部3年	女	文学部	学部1年	女

【活動場所】太白小学校

【活動内容】

家庭訪問の期間中の放課後, 午後 2 時から 3 時までの 1 時間程度で, 算数の学習指導補助を行った。希望した児童に学校で用意された算数, 国語のプリントを演習し, その答え合わせと解説を行う。活動中は 2 年生から 6 年生までを 3 つの教室に分けて児童はプリントを演習し学生は丸付けと解説を行う。算数の内容は計算問題と文章題, 国語は読み取りの問題であった。

【活動者の感想】

- 学校は様々な取り組みをされており, 学校全体に郊外学習の様子を描いた掲示物があり, 非常に活気がある学校であった。学年を分けて学習を行っていたが中の良い子供同士だとすぐに話を始めてしまう事があった。それとなく注意し, 集中させるように工夫が必要であった。また新入生で参加した学生の中には 5 月 1 日の活動に参加した学生が, 「もっと参加したい」と希望し, さらに 8 日, 10 日の活動に参加した。
- 昨年に引き続き参加しました。児童はそれぞれの速さでプリントを解いているため, 遅い子への励ましを心がけました。また, 複数の児童が同時に終わり丸付けを待ってもらわなければならない場面があり機嫌が悪くなってしまいそうになることがありました。その際は「次に行くから少し待ってね」などと声かけをして状況を理解してもらうようにしました。初対面にも関わらず明るく声をかけてくれる児童に驚くとともに, たとえ学生として短時間しか関わることがないとしても, 責任ある行動をとらなければならないと思いました。

【担当者の反省・課題】

小学校が大学から非常に離れているところがあったため, 交通アクセスの問題があった。

特に参加学性には一年生も多く、仙台の交通事情に慣れていない人がいたため、仙台駅のバスの時刻表を調べ、さらにバス乗り場の番号を確認し、事前にメールで通知する必要があった。

(担当:森田有一)

② 八幡小学校

【活動日】 平成 18 年 6 月～平成 19 年 2 月

【活動者】 合計 14 名 (下の表を参照)

2006年度の参加者(14名)					
情報科学	修士2年	男	工学部	学部2年	男
教育学	博士3年	男	教育学部	学部2年	男
法学部	学部4年	女	教育学部	学部1年	男
法学部	学部4年	女	教育学部	学部1年	男
教育学部	学部4年	女	教育学部	学部1年	女
教育学部	学部4年	女	教育学部	学部1年	女
教育学部	学部3年	男	文学部	学部1年	女



【活動場所】 八幡小学校

【活動内容】

水曜日の放課後、午後 2 時から 3 時までの 1 時間、算数の学習指導補助を行った。希望した児童に学校で用意された算数のプリントを演習し、その答え合わせと解説を行う。活動中は 4 年生の担任の先生方が各教室においてボランティアの学生はその補助を行う。プリントの内容は計算問題がほとんどである。分数や小数、筆算など小学生が最初につまずきやすい内容を中心としたプリントであった。

【活動者の感想】

- 児童の皆さんは本当に元気いっぱいでした。少し難しいプリントにも果敢に取り組む姿に教える側としても熱がこもりました。担当の先生方から「いつもの算数の授業では行き届かない子供たちまで見てもらって大変助かる」「生徒たちが待ち遠しいと言っている」などの声を聞かせてもらい活動をやっていて良かったと感じました。校長先生をはじめ、4 年生の担任の先生方と参加したボランティアの学生とが話しやすい環境であったので、意見交換がスムーズで運営面でも非常にうまくいきました。

【担当者の反省・課題】

活動に参加した学生が 14 名と多かったことからなるべく連絡を密にするようにした。今後は水曜日が 6 限までの授業となるため継続は難しいが、今後とも続けていきたい。

(担当:森田有一)

③ 荒町小学校

【活動日】 毎週水曜日と土曜日（年度末まで．学生の都合によって変更可能．）

【活動場所】 荒町小学校

【活動者】 教育学部 4 年（女性），教育学部 3 年（女性），教育学部 3 年（女性）合計 3 名

【活動内容】

ブラスバンド部の指導補助．学生が経験したことのある楽器のパート練習の指導を行うほか，合奏に参加することもあった．技術面の指導だけでなく，音楽の楽しさを伝えることに重点を置いている．演奏会を観にいくなどの交流も行った．

【活動者の感想】

- 小学生と一緒に活動するのは初めてだったので，最初はそのパワーに圧倒されました．名前を覚えて声をかけると，みんな喜んでくれて仲良くなることもでき，小学生と話すのは心があつたまる感じでした．小学生のスクールバンドで基本もまだできていない子も多いので，ちょっとしたアドバイスですごく上手になることもあって，“教える喜び”を感じました．
- 自分が今までやってきたことだったのですが，教えるとなるとどう教えればうまく伝わるのか私も試行錯誤しながら一緒に勉強させてもらいました．子どもの方から質問してくれたり，「できた！」と言いながら叩いて見せてくれたりしたことが嬉しかったです．また，時際にやってみせると飲み込みが早く，「こうしてみたら？」と言ったことを一週間後にマスターしていてくれたりもして，教えていて楽しかったです．いろんな話もしたし，楽しく過ごせています．同時に，自分の力のなさを感じたりと良い勉強になりました．アンサンブルコンテストに向けての練習は完全にパートで 1 曲を作ったので，先生がいない間に教えていて伸びていくのがわかり，子ども達と一番真面目に練習して，コミュニケーションも多くとれた時間だったなと思っています．最初のうちは，自分のいる立場に困りました．（先生ではないけど大人だし…みたいな感じで．）一緒に遊んでいて子どもが怒られたり等もあったので，位置づけがはっきりしているといいかなと思いました．最初のうちは先生とコミュニケーションをちゃんと取らず，口頭で伝えていたために行ってみたら練習がお休みだったこともあったので，メールでこまめに連絡をとるべきだったなと思いました．
- 音楽の知識（特にブラスバンド関連）がなくてもなんとかやっていけます．何よりもまず，子どもたちとの交流を楽しむことができました．夏のコンクールを見に行きました．結果は惜しかったけれど，皆の頑張っている姿を間近で見ることができてよかったです．子どもたちのペースにおされつつも，時には威厳を保つように頑張ればよかったと思います．

【事務局担当者の反省・課題】

事務局メンバーが参加していない活動であったため、年度末に活動者と報告会を実施したが、詳細な活動内容を把握したり、活動学生の喜びや悩みを知る良い機会であった。年度末だけでなく学期ごとに報告会を実施すればより充実した活動になった。同様に、学校にも事前の打ち合わせだけでなく、年度末にも報告の機会を設けることで、継続した関係が構築できるのではないかと考える。

(担当：八木美保子)

④ 中田小学校

【活動日】平成18年5月23日～年度末まで。長期休業中を除く、毎週火曜日・午前中

【活動者】教育学研究科博士課程後期（男性）1名

【活動場所】中田小学校

【活動内容】

毎週火曜日の3-4校時を活動時間帯とし、三年生の各クラス（3クラス）を対象に、昨年4月からほぼ一年間にわたって活動した。

算数の学習補助（一学期には加えて、「総合」の時間におけるパソコン操作の補助）が、主な活動である。なお、依頼された活動とは別に、子どもたちと一緒に給食を食べ、交流をはかるといふ活動も継続して行った（給食費は自己負担）。

算数では、主にドリル学習など、技能の定着を図る学習の際に丸付けを行ったり、周囲と比べて遅れが生じた子ども、教師の指示を理解できなかった子どもがいた場合にそのフォローに入るという作業が多かった。パソコンの場合には、指示どおり作業を進められているかを確認し、パソコンの誤動作などがあった場合に対処を行った。

【活動者の感想】

- 遅れをとる子どもには、学習を支援するという理由から積極的に関わりが持てたと思うが、逆にスムーズに学習をこなす児童に対して、巡回中どう対応すべきかという部分で反省点が残った。また、補助に関わる授業の事前打ち合わせについて、いかにその時間を確保していくかという点で学生側から配慮していく必要性を感じ（現場の多忙、時間割変更・調整などの作業に関わるため打ち合わせ時間の確保を学校側から行うことは困難）、反省点として残った。

かつて子どもであった自分が辿った足跡を大人の眼で追体験するという貴重な経験を、学校ボランティアを通してすることができた。

【事務局担当者の反省・課題】

遠方の活動ということで集まりにくいと懸念したが、学校とゆかりのある学生が参加してくれた。遠方の活動の充足への一つのヒントになるかもしれない。

通年の依頼であったが、学生の都合に合いやすいように初め前期のみで募集をかけた。しかし、この学生は後期も快く活動してくれ、今回の場合、活動を前期後期で区切る配慮

は杞憂となった。

活動学生と担当者が普段顔を合わす関係ということもあって、活動の連絡がこまめにされなかった。反省すべき点である。

(担当：箕輪寛記)

⑤ 貝森小学校

【活動日】平成 18 年 6 月 12 日～14 日

【活動場所】泉ヶ岳少年自然の家

【活動者】文学部 1 年（男性）、法学部 4 年（女性）、工学部 4 年（男性）合計 3 名

【活動内容】

野外活動の補助。主には児童の安全面における手助け。初日では泉ヶ岳登山にて、体力的に登山速度にバラつきが生じるため、各児童のペースに合わせて付き添いをする。2 日目では、炭焼き体験時における火の管理、沢登りでの各児童のペースに合わせた付き添い。3 日目では、飯ごう炊さん時の包丁の使い方や火の管理等である。その他にも、児童の誘導や荷物運び等の活動を行う。

実務的にはこのような活動内容であるが、野外活動という親元から離れて不安になる児童達の良き話し相手、お兄さんお姉さんの存在としての活動意義も大いにある。

【参加者の感想】

- 短い期間ではあったが、3 日間共に生活することで我々大学生と児童たちとの間に生まれる信頼や友情には、野外活動でしか味わえない感動があった。山登りや沢登りで、元気一杯の児童たちに引っ張りまわされつつも危険を避けるように誘導し、疲労しきった身体の充足感も病みつきになりそうな感じがした。

【事務局担当者の反省・課題】

今回の活動では、ボランティア事務局と小学校側との連絡が比較的スムーズに行われ、打ち合わせの日程にも問題は無く、また活動自体も打ち合わせ時の内容を基に円滑に行われた。野外活動の指導補助のボランティアをする場合に、モデルとなりうる成功例である。反省点を挙げるとするならば、本活動での事務局の担当者の割り振りであろう。私はこの活動に参加者としてのみ関わったが、私もボランティア事務局のメンバーである。つまり私が参加者兼担当者としてこのボランティアに関われば、より円滑な情報伝達や事前の準備が出来たのではないだろうか。この点は 2007 年度の活動で改善していきたい。

(担当：増井拓哉)

⑥ 吉成中学校

【活動日】平成 17 年 10 月～平成 18 年 7 月

【活動者】教育学研究科博士課程（女性）、教育学部 2 年（男性）合計 2 名

【活動内容】

学習内容の理解に時間のかかる子が、放課後に学習支援ボランティアの学生と一緒に勉強する。対象学生は中学2、3年生で、それぞれ2、6名程度である。あらかじめ準備された問題を生徒が解き、ボランティア学生が間違ったところなどを解説したりする。活動当初の目的としては、学生-生徒間のコミュニケーションを積み重ねていくことで、その生徒にあった計画を一緒に考えていこうというものであった。活動は週一回で、水曜日の午後3時から5時までで、主に数学、英語の問題を扱う。

【活動者の感想】

- 放課後にやってくる生徒は成績の振るわない子が多いのだが、活動実態としては勉強の出来ない子に対する補充教室となっており、この活動に対する学校側からの積極的な働きかけが見えにくい部分があった。かといって学生として自主的に何かが出来るといふ余力もなく、結果的になんとなく続いていたということになった。確かに、活動の大きな目的として成績不振者の学習補助という面はあるが、それに加えて何か積極的な目的が見出せれば、よりよい活動になったのではないかと思う。だが、彼らとの交流は本当に楽しく、活動中は彼らの素直な姿が救いだったこともあり、授業の関係で参加できなくなったことは残念でもあった。スケジュールがもう少し柔軟になれば、と思う。

【事務局担当者の反省・課題】

学校との話し合いの場をもっと設けるべきだったというのが反省の第一であった。結果的にこちらからの提案やはたらきかけは無かったといってもいいので、改善の余地はあったと感じられた。どこまでは学生と生徒の間で決定できるのかが明らかになると、学生も自主的に様々な試みができたかもしれない。学校とボランティア学生との間の役割分業をどのように設定するかが、大切な打ち合わせ事項であることを痛感させられた。

(担当：石田賢示，杉原由佳)

⑦ 人来田小学校

【活動日】平成17年7月～平成18年3月

【活動場所】人来田小学校

【活動者】

演奏指導補助：教育学部2年（女性）1名

定期演奏会では、上記の参加者の他、工学部2年2名(男性1名，女性1名)，文学部2年1名(男性)，教育学部2年1名(女性)が参加

【活動内容】

毎週土曜日に小学校へ出向き、ブラスバンド部の演奏指導(トロンボーン，トランペットなど)の補助を、ブラスバンド部顧問の教員と行う。また、平成18年3月4日に行われた定期演奏会では、演奏者として子供たちに演奏の様子を見せた。

【事務局担当者の反省・課題】

昨年度も同様の活動があり、また、参加者も去年と同じ人だったため、参加者決定までは特に問題が起こることなく話が進んだ。昨年度は、定期演奏会の際に市教委・学校・事務局・参加者間の意思疎通が上手く行かなかった事で追加参加者の保険を掛けられなくなってしまったが、今年度は連絡を取り合うことでそのようなミスをなくし、円滑に活動を進めることができた。ただ、それでも参加者の活動状況の把握など、意思疎通が足りないと思われる部分があり、今後の課題である。

(担当：宮城 淳史)

⑧ 宮城県教育委員会 「地域学習支援センター」事業

【活動日】平成 18 年 7 月 25 日～8 月 4 日（柴田高等学校）

平成 18 年 7 月 31 日～8 月 18 日（古川黎明高等学校）

【活動場所】宮城県内の複数の高等学校

【活動内容】

仙台市以外の宮城県各地の高校を開放、古川黎明高校では午前中に小学生、午後に中学生が教室に入って勉強し、ボランティアの学生が個別に学習のアドバイスをした。午前、午後ともに 3、4 つの教室を使用し、1 つの教室におよそ 40 人前後の児童、生徒が入った。半日あたり 1000 円の謝礼と、実費で交通費が支払われる。一日活動する場合には、午前 8 時 30 分から午後 16 時近くまで高校にいることになる。活動に際しては、元教職の方からなる学習相談員と宮城教育大学の学生と協力して支援にあたる。

【参加者】教育学部 2 年（男性）、教育学部 1 年（女性）（古川黎明高等学校）

【活動者の感想】

- 小学校低学年の子どもと高学年の子どもが同じ教室で学習するため、低学年の子どもが集中力を切らしたときに高学年の子を邪魔してしまう光景がよく見られた。部屋を分けるという対策がとられると良いだろう。保護者の方から、「家で勉強するよりもはかどるのでありがたい」という声が教育委員会に寄せられたことから、子どもが勉強の勉強をつけるという点で効果があったようである。
- 勉強をしないで立ち歩く小学生やおしゃべりをする中学生に対しては、勉強をしている他の子に迷惑がかからないように、とりあえず座ってもらえるようにはたらきかける必要がある。良い経験になり、面白かった。「先生」と呼ばれるものの、教師然と振舞えるわけではないので、上からの働きかけでは特に小学生には効き目がない。そうした児童、生徒にこちらの意図を受け容れてもらえるように様々なコミュニケーションを図ることは楽しい。「楽しさ」が彼らに伝わると、自然と子どもたちは前を向いて勉強してくれる。もちろん、すぐに動き出すので、気長に付き合おうとする姿勢は必要だった。また、学習相談員の先生や宮城教育

大の学生と話ができたりするのも面白い。教職志望ではないからこそ、教職志望の学生と教職を経験された方の考え方に接することは新鮮である。学生にとっても非常に実りある活動で、何日間か継続して活動して味わえることが多い。しかし、そのためにほぼ1日を費やすことになるので、スケジュールに余裕のある学生でないと参加することは難しいだろう。せめて飲食の面でのサポートがあると、学生としては非常にありがたいのではないと思う。

【事務局担当者の反省・課題】

課題として、東北大からの参加者が少なかったことが挙げられる。来年度以降は、学生への周知の仕方を工夫したり、経験者との懇談会を設けて活動内容を知ってもらうなどの試みが必要だろう。

(担当：杉原由佳，花田佳菜子他)

⑨ 通町小学校

【活動日】平成18年7月～年度末

学生の都合に合わせて調整。各学生週一回程度。

【活動場所】通町小学校

【活動内容】

各々の学生が一つの学年につき、活動する時間帯に行われる授業の補助をする。様々な教科の学習補助に加え、休み時間に生徒と遊ぶなど幅広い活動を行っている。

【活動者】教育学部4年（女性），教育学部3年（男性），農学部3年（男性）

【参加者の感想】

- 「先生方がよく気を遣ってくれているため、トラブルもなくとても楽しく活動させてもらっています。

【担当者反省】

実際に活動に参加できなかったため、学校側との連絡も必要最低限になってしまい、通町小学校の特色等についても詳しく知ることが出来なかった。担当者自ら活動に参加するとともに、学校側との連絡も密に行い、より学生が活動しやすい環境をつくる。

(担当：阿部友幸)

⑩ 宮城県教育委員会「平成18年度みやぎ寺子屋事業」

【活動日】平成18年8月7日，8日

【活動場所】(株)ユアテック人材開発センター（富谷町）

【活動内容】本事業は宮城県内（仙台市を除く）の高校一年生を対象とし、参加希望生徒が2泊3日で講義・自習などの学習活動を行うものである。本年度は61名の高校生が参加した。この活動で大学生は、高校生全体へ向けて話をしたほか、自習時間中に生徒の分からないところや勉強等の相談に応じた。高校生全体への話の内容は、一日目は進路決定から大学での生活について、二日目は高校時代の勉強方法についてであった。

【参加者】 本活動の参加者は以下の通り計 6 名である。なお一日目の高校生全体への話には水原教授も加わった。

7 日	文学部 1 年（女）	工学部 3 年（男）	教育学部 3 年（男）
8 日	医学部 1 年（男）	理学部 1 年（女）	教育学研究科博士課程前期 1 年（女）

【活動者の感想】

- 大勢の前でポイントをおさえて話すことの難しさを感じた。自分の体験談を話すことでも参考になったようで、また自習時間にも話をしに来る生徒が多く、役に立て嬉しかった。時間の使い方など答えるのが難しい相談もあり、対応の難しさを感じた。高校生はそれぞれ悩みをもっているがこのように少し年上の大学生などと話す機会はほとんどない。このような機会がもっとあれば高校生も勉強の相談や今後の進路を考える上で役立つのではないかと思った、などが挙げられる。
- 水原先生がコーディネーター役、学部生 3 人がパネラーというパネルディスカッションでした。高校 1 年生は、受験勉強そのものよりも、身近な文理選択や、学業と部活動の両立の話の方が興味があるだろうと思い、その辺りの話を重点的にしました。水原先生の「国数英は考える道具で、理社が自然科学、哲学といった大学で行う本当の学問なんだ」というお話に、高校生は目からうろこのようでした。大学生への憧れの視線を浴び、身が引き締まる思いでした。

【事務局担当者の反省・課題】

この活動は参加学生の募集が困難である。学部、学年、性別ができるだけ偏りなくいるのが理想であるため、登録学生への全体募集は行わず個人的に声をかける形をとっている。しかし現状では登録学生で学部などに偏りがあるため登録学生だけではうまく調整できず知人を頼る形にもなり、どのように学生を集めるかが課題となる。また高校生全体へ向けての話の内容をこちらが任されてしまったので、県教委との連絡調整が求められる。さらに複数の学生が話すことで内容にまとまりがなくなるのを避けるために、ある程度学生同士で何を話すか事前の打ち合わせを行うようにするのも必要とされる。

（担当：佐藤真衣）

⑪ 木町通小学校

【活動日】 平成 18 年 10 月より毎週一日程度（活動者の都合により変更可能）

【活動場所】 木町通小学校

【活動内容】

授業内容理解のための支援。具体的には、授業中の個別指導を行っている。

【活動者】 教育学部 1 年（男性）

【事務局担当者の反省・課題】

本活動は、仙台市教育委員会以外からの学生個人に来た依頼である。市内の学校での活動であることから、ボランティア保険加入の都合上教育委員会を通すことが必要であり学

校ボランティアが仲介を行なった。そのため、活動にあたっての連絡調整を学生に任せている状態である。現在のところ充実した活動となっており問題はないが、来年度への引継ぎの際など事務局も学生と連絡をとる必要がある。

(担当：八木美保子)

⑫ 長町小学校

【活動日】毎週火・水曜日（活動者の都合により調整）

火曜日1名，水曜日1名

【活動場所】長町小学校

【活動内容】

勉強に遅れがみられる子どものサポート

【参加者】教育学部3年（男性），理学部3年（女性） 合計2名

【事務局担当者の反省・課題】

長町小は学生ボランティアに理解があって活動しやすい学校だとも思います。ただ、大学からは離れた場所にあるのですが、交通費が全く支給されていません。交通費問題が今後の課題です。

(担当：小野寺雄太)



⑬ 貝森小学校

【活動日】平成18年1月12日～年度末まで。毎週火・金曜日午前中

【活動者】教育学部3年（男性），文学部3年（男性）合計2名

【活動場所】貝森小学校

【活動内容】

小学校3年生のクラスでの、授業の指導補助。教科は国語と算数が中心で、つまづいている児童には声をかけ、児童のやる気が持続するようにするのが主要な役割。授業中は、学習に苦手意識を持っている子を中心に相手をするが、休み時間は学年の垣根を越えて、みんなで外で遊ぶ。

【活動者の感想】

- 毎年ボランティア依頼をしている学校なので、活動しやすかったです。私自身1年ぶりに会う児童達と思い切り遊ぶことができました。算数の指導補助では、二桁の掛け算の単元でしたが、間違えて覚えている児童も少なくなく、授業の進行に追いつくようにヒントを教えていくことは、やりがいのある指導だったと思います。大雪の日の朝に遅刻していく旨を伝えようとしたところ、学校側がお休みにしてくださって、助かりました。

【事務局担当者の反省・課題】

大学生のテスト期間と活動開始が重なっていたので、テスト終了後追加募集をかけた

ころ、昨年度も参加してくれた学生が参加してくれた。追加募集が功を奏した。

就職活動で何度か活動を休む学生がいたが、小学校の連絡が当日の朝になってしまうことがあり、ご迷惑をかけてしまった。学生の早めの連絡を促さなければならない。

(担当：箕輪寛記)

(3) 事務局の活動

学校ボランティア事務局（以下、事務局）は、学校ボランティアを円滑に運営するための中核となる組織である。主な活動内容は以下の通りである。

- ①学校ボランティアの活動全体の企画・運営
- ②登録学生募集のための広報活動
- ③宮城県・仙台市の各教育委員会との連絡調整
- ④各学校と学生との連絡調整
- ⑤学校ボランティアホームページの管理
- ⑥学内外に向けての広報活動

今年度事務局で重点的に行ったのは、広報活動である。入学式で初めてPRをしたほか、学期の始めには積極的に教養教育の授業内で説明を行った。現在はプロモーションビデオの作成など、新たな企画が進行中である。

はじめに述べたように、今年度は創設期メンバーの卒業と人数の増加に伴い、新たな課題が生まれた。具体的には、学校ボランティアの創設主旨や理念をメンバー全員で共有すること、各メンバーの主体性を育成すること、明確な役割分担システムを構築すること、新メンバーを計画的に育成することなどである。

これまでは10人以下の少人数であったため、日々の交流の中で目的意識を共有し、活動を共にする中でやるべき仕事を伝達することが可能であった。また、一人当たりが分担しなければならない仕事量が多かったため、仕事を覚えるまでの期間も短く責任感も生まれやすかった。したがって、一人ひとりが自分の考える仕事をこなすことで、結果的に全ての仕事を網羅することができていた。しかし、今年度はこれまで無意識にできていたことが意図的に計画しなければ困難になった。意欲を持って入ってくれた新メンバーを如何に活動に巻き込んでいくかが重要課題であった。

そこで、新メンバーと継続メンバーで構成する複数人での担当制や、責任者の指名、紙媒体での情報の蓄積、ミーティングや活動の記録作成と、掲示板を通してのそれらの共有を行うことで課題の克服を目指した。

その結果、年度末には4月から事務局に入ったメンバーの多くが自ら必要なことを考え、他メンバーに働きかけができるまでに成長した。また、人数が増えたことでできることが増え、既存の活動が質・量ともに改善されただけでなく、新たな個性が加わったことでプロモーションビデオの作成や学外団体との交流など来年度に向けて新しい企画も始めている。

(4) 今後の課題

平成16年度の活動報告⁴では、①活動の充足率の上昇、②ボランティアの単位認可など学生がより活動しやすい環境の整備、③活動依頼の基準、④学生の活動費用、⑤事務局スタッフの人数確保の5点が課題として挙げられていた。

この課題の中で、事務局スタッフの人数に関しては克服できたといえる。しかし、他4点に関しては徐々に改善されているものの更なる努力が必要である。

はじめに、活動の充足率について検討する。仙台市教育委員会によると⁵、今年度は学校側から約600件の要請が来たのに対し、実際に学生を派遣できたものは200件程度であったという。仙台市教育委員会からの依頼を受けているのは東北大学を含め4大学あるが、そのうち本大学には25件の要請があり、応えることができたのは11件である。これは活動依頼の基準という課題にも関わるが、依頼の多くが障害を持つ児童・生徒のサポートであり、専門的な知識が必要とされるため、対応できないのが現状である。遠方の学校になると、交通費や時間の確保という面でどうしても希望者が少なくなる。

しかし、学校側は深刻な人手不足にあるようで、教育委員会としては、そういった学校の現状を広く学生に知ってもらうことも、学生にボランティアとして教育活動に参加してもらうことの目的であるとしており、学校ボランティアとしても考慮する必要があるだろう。

具体的には、信頼関係が構築できている学校での活動を見学したり体験参加をしたりする機会を設け、活動を始めやすくする、勉強会や事前講習をすることで障害を持つ児童・生徒のサポートにも対応できるようにするなどの対策が必要であろう。

次に、学生が参加しやすい環境の整備であるが、当時の憂慮に反して多くの学生が長期にわたって活動をしている。これは学生の意欲が高いことと、学校側が学生の都合を配慮してくれていることで可能になっていると考えられる。今のところ単位認定の予定はなく、学生側からも要求はないが、状況によっては大学側に要求することが必要になるだろう。

3点目は活動依頼の基準である。現在学校ボランティアでは、原則として宮城県および仙台市の各教育委員会を通しての依頼と、大学内の教育・研究活動の依頼に依っている。その中で、学校間での学生ボランティア活用の意識の違いが問題となった。学生ボランティアを活用することでより充実した教育活動を志向する学校がほとんどであるが、学生に任せきりの状態となって学生が戸惑うこともごく少数だがあった。これに関しては、教育委員会の担当者と綿密に連絡をとり学校側の意識を高めてもらったり、活動現場の教員に直接要望したりすることで解決していくことを目指したい。

4点目は学生の活動費用である。特に交通費の確保は早急に解決しなければならない。

4 前掲「「大学生による学校参加ボランティア・プロジェクト」の実践報告」東北大学教育学研究科 教育ネットワーク研究室『教育ネットワーク研究室年報 第5号』平成17年3月

5 年度末に行った仙台市教育委員会教育指導課との打ち合わせの中で出された。

これは活動の充足率にも関わる重要事項である。現在仙台市教育委員会で市議会に要望を提出しているが、教育費の削減に伴い実現は難しいようである。そこで今後は、教育委員会と連携してアンケート調査や活動のPRを行うなどの働きかけをするほか、企業からの資金援助を得る計画も動き出している。

さらに、今回新たな課題として以下の3点を追加したい⁶。

1点目は中学校、高等学校での活動が少ない点である。これは仙台市教育委員会も指摘しているが、小学校では大学生のボランティアが定着しつつあるが、中学校・高等学校では定着度が低いということである。教科担任制のため学校全体で学生ボランティアを受け入れる協力体制が取りにくいことや、部活動や生徒指導が忙しく学生ボランティアの活用という新たな方法を取り入れられないなどの要因が考えられる。部活動の指導など、こちら側から企画を持ち込むことも必要であろう。

2点目は、系統的な記録の蓄積である。これまでの情報量は、事務局メンバーで把握可能であった。しかし、活動が5年目に入り創設当時から関わる学生が全員卒業し、多くの学生が関わるようになったことで、記録作成のシステムを構築しなければ活動全体の把握も、活動状況の伝達も困難になりつつある。また、学内外に学校ボランティアを広報するためにも記録は必要不可欠である。来年度は、記録作成を意識した運営をしていく必要がある。

最後に、新たな可能性の模索を挙げたい。現在は活動場所を学校に限っているが、本団体はもともと顧問である水原が構想した「学生の自己形成のための社会体験活動」として始まっており、その理念に則ると学内でのピアサポートや企業でのインターンシップなどへと展開していくことも可能である。そこで、今後は創設当時の理念を受け継ぎながらも、他の社会活動についても調査や勉強会を実施し、5年目を迎える学校ボランティアをより充実した活動にしていきたい。

3. 教育効果の検討

最後に、以上の報告および実際に学校ボランティアで活動してきたことを踏まえて、大学生が主体的に社会活動を行うことの教育効果を検討する。

まず、異年齢集団との関わりによる効果がある。異年齢集団の交流が教育効果が高いことは、初等中等教育でも頻繁に指摘されることである。これは大学教育でも同様であろう。学校ボランティアでは、18歳から26歳までの幅広い年齢の学生が活動を共にしている。経験の長い者が一定の配慮はするが、そこには教授関係はなく、仲間として同等の責任が課されるのである。年齢に関係なく他者の意見や仕事の成果を評価し、同様に批判もする。その中で学生は一人ひとりが「自分は何ができるか、何をすべきか、何がしたいか」を主

6 今年度は東北大学高等教育開発推進センター編『「学びの転換」を楽しむー東北大学基礎ゼミ実践事例集ー』に学校ボランティアの活動報告掲載する機会を得た。こちらにも課題をまとめたので、合わせて参照していただければ幸いである。

体的に考える必要があり、それが成長を促す。一定の緊張関係が保持されることで、常に成長する機会が与えられるのである。

次に、社会との交流によるマナーの定着である。例えばメールを送る際や電話を掛ける際の言葉遣い、学校に行く際の服装や挨拶などは、打ち合わせや日々の活動の中で意識的に改善を呼びかけており、学生はその呼びかけを通してあるいは仲間との比較で自分の振る舞いを省みている。学校という場に行くことで、児童・生徒の模範となるよう心がけることもあり、定着度は高いと考える。

3つめは、予期せぬ事態への臨機応変な対応や柔軟性が身につくことである。活動は、必ず事前に打ち合わせをしたうえで始まるが、時として思いもよらない状況に陥ることがある。その時必ずしも教員や仲間が同席しているとは限らず、自分で判断することを迫られる経験をしている学生も多く、反省を繰り返しながら経験を積んでいる様子が窺えた。

最後に、教育実習としての効果が期待できることである。東北大学は教員養成課程を持たないが、教員志望の学生は少なくない。教育現場での経験が少ないことに対する不安を持つ学生は多く、彼らに学校での活動の機会を与えられるのは貴重であろう。⁷

7 本報告は、各活動の概要は担当した事務局メンバーが執筆を担当し、該当箇所の終わりに氏名を記した。その他は八木美保子が代表で執筆している。